
The end of world

もう振り向かず歩いてゆけるさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The end of world

【Nコード】

N8362K

【作者名】

もう振り向かず歩いてゆけるさ

【あらすじ】

「災いを齎す幻想に、終焉の眼を見せし時、終焉 平等に訪れて、世界を救う鍵と化す」

世界が幻想の手によって滅んだのは、今から何千年も前。人々は、ただ呆然と見ているだけなのは昔。

抗う人が立ち上がり、世界を救わんと立ち上がる。幻想狩りを職とする聖職者……。

そして……堕聖職者……。

第1章：魔女狩り（ウィッチキラー）と魔女（前書き）

残酷な描写 時たまに有り。

初めてなので、暖かい目をお願いします

第1章：魔女狩り（ウィッチキラー）と魔女

空は死んだ。大地は虫の息。空気は・・・表現ができない・・・とりあえず汚いのだ。

最悪にして災厄の幻想が殺しに殺した世界に生きる人間には、ただ死を待つものもいれば、抗うものもいる。

圧倒的に多いのは、死を待つ人間 シーデス。

死を待つといっても、幻想がくれば抗わず殺されるが、幻想が来なければ普通に生きるのだ。

朝起きて、死に掛けの大地からとれた儂い生を食し、夜になれば寝る。

そんな生活だ。

「死」が身近になった以外は大して変わらない毎日だ。

そんな中抗う人間はというと

.....

「こんな不味い食べ物が20ゼンだつて！？アンタら、どうせシーデスなんだろう！？金なんていらねえだろ！！」

金髪頭が目立つ、黒いコートを羽織った少年がとある店主に怒鳴りつけていた。

「いんや、シーデスとか関係ないねっ！！20ゼンは20ゼンだ！文句あんなら、他所で食いな兄ちゃん！！」

「上等だ！！」

パンツ！とテーブルを叩き、ドンツと椅子を蹴っ飛ばして、金髪の少年は店を出た。

なんだつてんだ・・・なんだつてんだ！

20ゼン？ふざけんなっ！！シーデスのくせして！！

あのチキン野郎.....

くそっ！！とぶつぶつ悪態をつきながら金髪の少年は、道を歩く。

どの村もそうなのだが、この村もそうだ。
生を諦めたシーデスが集う村は全体的に黒い。
世界が黒いのがから、黒いのは当たり前なのだが、雰囲気は黒いのだ。

金髪の少年は、まだぶつぶつ言いながらある所を目指す。
その、ある所というところと魔物が跋扈する森を抜けるとある。
古城だ。

古城には絶対というほど幻想が住み着いているのだ。
幻想・・・それは、ドラゴン、魔女、吸血鬼、魔物。色々ある。
それが幻想。

そして、その幻想を狩ることを職とするハンター。
ユーテ・フォルマンもその一人。
世界を救う聖職者。

ところどころに、亀裂が走り。

ツタは天に向け古城つたいに伸び、その古城に入るための門は鎖で
硬く閉ざされていた。

それは、よくホラー映画などで見る古城によく似ていた。

「さ、流石に、迫力あるぜ・・・」

ユーテは顔を引きつりながら、古城の門へ近づいた。
鎖が幾重に巻かれ、門は硬く閉ざされている。

うーん、門の前でユーテは考えた。
どうやって入ろうか？壊そうか？

ふと、腰にぶら下がっている銃と剣に目をやった。

銃の清め弾は鎖に使いたくない・・・

かといって退魔の剣を鎖に使って刃こぼれなんかしたら面倒だ。続いて、門を見る。

門は鉄の柵のように所々縦に長い間があるが、ユーテが入れるほど縦の間も広くない。

ということは一・・・

「上るか。」

ユーテはそう呟くと、がしゃがしゃ門を上り始めた。

別に、上れない高さではなかった。

かなり高かったが、この程度のぼれなければ魔女狩り（ウィッチキラー）は勤まらない。

無事、中に入ると古城の正面玄関がすぐに目に入った。

正面玄関も硬く閉ざされている。

ユーテは正面玄関の前までくると手をあて扉を押ししてみた。

ギギギギギと鈍い音をならして、ゆっくりだが確実に扉は動く。

そのまま、力を込めユーテは扉を潜った。

古城の中意外にも汚くはなかった。

カーテンは破れ、窓ガラスなどは砕け散っているものの、砕けたガラスは見当たらず、埃っぽさもない。

「つい最近まで、誰かが住んでいたのか・・・？」

もしくは・・・

タラつと汗が頬を伝う。

「幻想がすすんでいるか・・・か。」

できれば、戦いたくない。

それは、どの狩り人だっと思うことだとユーテは思っている。どんな人間だっつて、限りある命は大切にしたい・・・はず。

少なくともユーテはそうだ。

ユーテは、まだ16歳の少年なのだ。

死は怖い。

ユーテは、そんな恐怖を振り払ろうと頭を横に振ると、再度古城内を見渡した。

赤い絨毯が下にしかれ、正面には階段がある。階段は途中、二手にわかれている。

二階があるのは、古城のでかさでなんとなくわかっていた。今、自分がいる一階にはおそらくなにもないだろう。

ユーテはそう考え、階段をのぼる。

途中、二手にわかれている場所で後を見た。

なるほど、この階段はデザインで二手にわかれている意味は無いと。

ユーテは右の階段をのぼり二階に向かった。

「!？」

二階についた、その瞬間だ。

廊下にある、蝋燭の炎がいつせいに灯った。

(「幻想の演出か・・・?」)

二階は、縦に長い廊下があるだけ。

途中途中に扉がある。

一個一個部屋を調べるか・・・。

地味な作業が続きそうだ。

ユーテはそんなことを考えながら、腰にぶらさがっている二つの武器のうちひとつ、退魔の剣に手をつけると警戒しながら、前へ進んだ。

見る限りでは、部屋は右左にあり合わせて6つというところだろう。ゴクリの生唾を飲み込み、ユーテは最初、右の扉に手をかけた。ゆっくりと警戒しながら扉を開く。

.....

「negative・・・なんもないぜ・・・」

次、左・・・

「ここもか……。」

次 右……

「異常なし……。」

左……

「何もない……何も無いほうが不気味だぜ……」

右……

（「何もないな……罨とかは仕掛けないタイプの幻想か？という
ことは、自分の力に絶対的な自信があるか……もしくは、実はもう
知らない間に罨にはまっているか……だな。」）

そして、最後の扉の前にユーテはやってきた。

汗が再び頬を伝う。

「ここで、戦死とかな……ハハハ」

と自嘲してみる。

ドクンドクンドクンと、心臓の高鳴りを感じる。

右手に退魔の剣。

左手に清めの弾がはいった銃。

力には多少の自信はある。

勝てなくともだ……万が一死んだとしてもだ……

傷は残せるはずだ！！

そこで、ユーテは気づいた。

いつのまにか、自分の死を前提とした考え方をしていたことに。

「アハハ」

ユーテはニヤリと笑い、そして……

扉を蹴破った。

「うおらあああああああああ……！！」

勢いよくユーテは部屋に入った。

……？

あれ？何かがおかしい？

……そうか……。

「暗い……こここの部屋だけ火が灯ってないんだ。」

他の部屋は、部屋全体が見えるように火が灯っていた。しかし、この部屋は違う。

まるで、部屋全体を見せたくないかのように……。あまりに……。無防備だったことをユーテは悟った。馬鹿だった……。

この部屋にも同じように火が灯っているなんて考えてる自分がいたんだ。

警戒は充分していたはずだった。

しかし、甘い考えだったんだ……。

もし、この部屋に幻想がいて、その幻想が殺気立っていれば自分は死んでいただろう……。

ここで、ユーテは糸が切れた人形のように、床に座り込んだ。

（「くそ……。甘かった。死を間近で感じた。」）

ユーテは完全に自分の世界に入っていた。

この、幻想がいるかもしれないという古城の部屋の中……。しかし、すぐに呼び戻されることになった。

そう、あの声のせいで……。

「貴様か……。あまりにも弱い、あまりにも脆い……。そんな体で私を狩れるのか？」

ドクン……ドクン……

「なっ……っ」

火がいつせいにともる。

部屋全体が、急に明るくなった。そして部屋の真ん中 ドンと存在感のある存在

「なっ……。っあ、っ……。あ……」

言葉にならない言葉が次々と、ユーテの口から漏れ出す。

「どうした？狩り人よ．．．私を狩りにきたのではないのか？」
カリニキタ．．．？カリビト．．．？
カリビト．．．カリビト．．．
そうだ、俺は幻想を狩りにきたんだ．．．
こんなところで、へたりこんでる暇なんて．．．
（「ないんだ！！」）

「ああ．．．そうだった。」
「？」

幻想が驚いているように見える。

俺が、無気力でへたり込んでるのを見て、戦意喪失さようなら
か思ってたんだろうが．．．

そうはいかねえ．．．。

俺には．．．俺には、やらなければならないことがあるんだ．．．

「幻想．．．お前はなんだ？」

ユ一テは、よろよると立ち上がり幻想に問う。

幻想はキョトンとした顔を、すぐさま黒い笑みへと映り変えた。

「クククク．．．面白い。私は終焉の魔女アリア！」

終焉の魔女．．．アリア？

ちよつとまで。

ユ一テは急に顔を青くした。

「．．．幻想．．．、お前は何だつて．．．？」
は？

とアリアは言うつと、もう一回 力強く「終焉の魔女アリア」と言っ
た。

ちよちよちよちよ．．．

終焉の魔女つて．．．おいおい。

数千年前、世界を混沌に貶めた幻想がいた。
その幻想、数にして6

惨劇の王者 ホール
霸滅の龍王 ヴアルグラム
深淵の靈貴族 ゼフェラン
暗黒の騎士 イズール
消滅の腐人 デイクト

そして・・・
終焉の魔女 アリア
なのだ。

その終焉の魔女アリアが、ユーテの目の前にいる。
意味がわからん・・・。

ユーテは混乱した。
別に、6つの幻想が封印、もしくは討伐されたという言い伝えは無い。
い。

だから、いてもおかしくないといえはおかしくないのだ。
しかし、ユーテには信じられなかった。

あの伝説の魔女が今、目の前にいる・・・。
そして、自分はこの魔女と戦おうとしている・・・。

「嘘だろ・・・」
もはや笑いしかでない。
「嘘ではないぞ。」
淡々と返す、伝説の魔女。

いや、まてよ。まてまてまて。
ユーテは目の前の魔女を見る。
黒いドレスを着た、自分と同じくらいの歳の形をしている魔女だ。

黒い髪に白い肌・・・赤い目は不思議と澄んでいて、とても綺麗な。

(「コイツが・・・あの伝説の・・・終焉の魔女アリアなのか?」)
もしかしたら、力が弱すぎて嘘をついているのかもしれない。

演出・・・そうか!!

「演出か!!」

掌にこぶしをのせると、ユーテは言った。

「演出か、演出　ハハハ!やべえ・・・もう少しで騙されるところだ
つたぜ・・・」

終焉の魔女アリアと名乗る魔女はまた、キョトンとしてユーテを見る。

ユーテは笑いながら続ける。

「おいおい、いくら弱いからって、嘘はいけないだろう(笑)マジ
でびびっちゃまったじゃねえか」

「嘘なんて、ついてないわ」

「それが嘘だろ」

「・・・どうやってたら信じてくれるのよ・・・」

「その発言でますます信じられなくなった(笑)」

「・・・(ムカムカ)」

終焉の魔女アリアと名乗る魔女がいらついできている・・・。ククク
ユーテは口を吊り上げる。

さてと・・・

(「冗談はここまでだ・・・悪いけど・・・」)

「狩らせてもらっぜ!!!」

ダンッと床を思いっきり蹴り一気に距離を詰める。

退魔の剣を横一線になぎ払った。

ブンと空を斬る音。

・・・手ごたえが無い・・・。

あの速度、避けたのか・・・アイツ・・・?

周りを見る・・・終焉の魔女アリアと名乗る魔女はいない・・・。

（「どこにいった・・・。」）
ぐるりと見渡すが居ない・・・。
どうなっている。。。

そこで、ユーテは再び恐怖を抱いた。
警戒しながら、右の退魔の剣と左の清めの弾が装填されている銃を構えた。

剣が届かない範囲にいれば、銃。
距離をつめこまれたら剣・・・。
ドクドクと血液の流れを感じる。

「ど、どこにいやがる・・・。」
部屋から出たのかと思い、脱出口の扉に目をやる。
硬く閉ざされている・・・。出たとしてもあの扉は劣化していた。
どんなに慎重に開け閉めしたとしてもギギギという音は鳴る。
ならば・・・魔法か？

「クククク・・・私はここだ。」

そんな、考えをめぐらせていると、どこからともなく声が聞こえて来た。

脳に直接語りかけるような・・・
とても、綺麗な声が聞こえる・・・。

黒い影がユーテの前を通り過ぎた。
ユーテはビクつと体を少し震わせ、影が行ったほうを向く。
そこには、さっきの魔女がいた。

「おいおい・・・アンタ、結構やるのな・・・。」
魔女は不敵な笑みをみせ・・・。

「どうして、この古城に来た？」
と、予想していなかった言葉を投げかけてきた。
ポカンとユーテは少し呆ける。

どうして・・・？どうしてって・・・。

「この近くに古城があるって噂を耳にしたからだよ。」

「なるほど・・・。」

と魔女は言う。

なんだ？どういふことだ？

ユーテは戸惑った。しかし、今は戦いに集中しなければ。

この戸惑いを捨てなければ・・・。

「そうか・・・そうかそうか・・・退屈だったんだ。」

「そうかい・・・。」

ユーテはじりじりと魔女から距離を置くと、銃口を魔女に向けた。

「俺が消してやるから、もう退屈する必要なんてねえよ！！！」

と同時に、ドンっという銃声なる。

火薬の匂い・・・。

やったか・・・

清めの弾が装填された銃だ。

清めの弾が幻想の肉にめり込めば、幻想が消えてなくなる。

要は一撃必殺だ。

しかし、それは淡い期待でしかなかった。

確かに、普通の幻想ならば一撃だ。しかし、この魔女は違った。

「フン・・・清めの弾か・・・小賢しい・・・。」

無傷だ。

まるで、意に介しないその強靱な肉体。

「おいおい・・・まさかあ・・・アンタ・・・マジで終焉の魔女アリアだつたりするのかわ？」

「そうだと言っただろ？」

やや不機嫌にアリアは応えた。

終わった・・・。

ユーテは流石に諦めた。生きることを諦めた。

終焉の魔女。それは、死の代名詞。

ユーテのような未熟者が勝てる相手ではなかった。

さつき、死を前提にした考えで、傷がつけられればとか思っていたが、それも無理だ。

完全に敗北。

くそっ・・・こんなところで、人生を終えるのか・・・。

ユーテは再びへたり込む。

終わった・・・死だ・・・死死死死死死死・・・死以外存在しない。

終わりだ。終焉は訪れた。死だ・・・くそ、死んだ・・・終わった・・・。

自分にできることは、もう無い・・・。

せめて、潔く死のう。

そう思ったユーテは「殺せ・・・」とアリアに言った。

しかし、アリアからはまたしても意外な応えがかえってきた。

「は、はやまるなっ!!」

「は??」

思わず耳を疑った。

終焉の魔女・・・死の代名詞から「はやまるな」なんて聞けるはずがない・・・。

そうだ、これは幻聴だ!

俺の、生への執着心が生み出した幻聴なんだ!!

そしてもう一度・・・

「くっ・・・殺せ」

「遠慮しとく」

「は??」

思わず耳を疑った・・・

と、危うくループするところだった・・・。

そして、次に信じられない言葉をユーテは耳にした。

「契約・・・しないか??」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8362k/>

The end of world

2010年10月14日15時19分発行